

第94話 (72頁) 学のあるむすこ

むすこが都会から田舎の父親のもとにやってきました。父親が言いました。  
「きょうは草かりだ。さあ、くまでをもって出かけよう。手伝ってくれ。」  
むすこは、はたらくのがいやで、こう言いました。  
「学問をやっていたせいか、お百姓の言葉をぜんぶわすれてしまったな。くまでって、何だっけ？」  
むすこが庭に出たとたんでした。むすこはくまでをふんづけてしまい、おでこをゴツンとやられました。すると、むすこは、くまでを思い出し、おでこに手をやると、言いました。  
「こんなところに、くまでをおいたのは、いったいどこのどいつだ！」

「落ちが笑い話になっていて、思わず、吹き出しちゃった。(一同うなずく)」

「息子の間抜け加減が際立っている。読んだ子どもたちも笑ってしまうよ、きっと。熊手を間違っって踏みつけ、反動で長い柄がおでこに当たった場面なんか、臨場感たっぷりだ。」

「息子ならずとも、この熊手を庭に置いたのは誰なんだろう？と想像したくなる。まさか父親とは考えにくいし…」

「雇っている使用人が置き忘れたとか、ね。この農家は、使用人がいたかどうかはともかく、ある程度裕福で、暮らしに余裕があるんだろう。」

「確かに。息子を都会に出せるぐらいだからね。いまは息子は大学に通っていて、休みか何かでちょっと帰ってきた、というところかな。」

「都市と農村。言い換えれば、都会と田舎。その生き方や暮らしを対比して考えさせようとした気がする。」

「息子は都会にいることを鼻にかけ、ぶっついて、田舎や百姓を馬鹿にしている。」

「それを端的に示したのが、『学問をやっていたせいか、お百姓の言葉をぜんぶ忘れてしまったな。』とつぶやいた場面だ。」

「次の『くまでって、なんだっけ？』が、さらにふるっている。」

「農作業の手伝いをしたくないばかりに、こんな嘘までつくのか、って言いたくなるよ。」

「その嘘がすぐばれて、息子は立場がなくなってしまう。自業自得というわけだ。」

「息子が自慢しようとした学問も、実ほうわべだけ。すぐに地が出た、という落ちだ、とは読めないか。」

「都会の言葉は上品で繊細であか抜けている。それに引き換え、田舎の言葉は泥臭くてみっともない。息子はそう思っているのだろう。」

「標準語と方言か。日本でも、そういうとらえ方はあるよね。一方で、田舎に帰ったら、言

葉遣いもアクセントも昔の言い方に戻さないと、みんなから仲間外れにされかねない。」

「この息子は、大学を出ても、そのまま都会に住んで、役人とか勤め人になろうと思っているのだろうか。」

「息子が田舎を毛嫌いしていることは間違いない。父親はやっぱり、百姓を継いでもらいたいだろうに。」

「教育を受けると百姓が嫌になるのはどうしてか。それを考えさせようとしたのが、無着成恭さんの『山びこ学校』だったけど、何か通じるところがあるような気もするよ。」